第 74 次　印旛地区教育研究集会

国語研究部「書く」分散会

「実の場」を意識した「書くこと」の授業実践

～教科等横断的な学習、外部機関との連携を通して～

印旛支部

印西市立印西中学校

1　目指す生徒像

本研究では、社会の状況や本校生徒の現状に照らし、以下の生徒像を目指す。

・「答えのない問い」に向き合い、思考し、判断し、表現する生徒
・国語科で身につけた力を、実生活や社会、他教科での学び等に生かそうとする生徒
・課題を解決するために、自らの学びを調整する生徒

2　研究主題

「実の場」を意識した「書くこと」の授業実践
～教科等横断的な学習、外部機関との連携を通して～

★「実の場」とは：

国語教育を大きく発展させた教育者である大村はまの実践から生まれた言葉。国語教育学者・橋本暢夫*[1]は、大村はまの実践について「実の場」を次のように定義している。

> 学習者が自己の生活目的のために立ち上がる姿勢になっている主体的な学習の場をいう。形式的な学習の場、虚の場に対して、生きた言葉の力をつけるための具体的な活動の場を指す。単元学習の実践の場から生まれた言葉である。学習内容が身につくのは、学習者が必要感に根ざした関心・意欲をもったときであると早くから主張されてきたが、教師主導型の教室ではそうした姿勢を育てる配慮に欠ける面があった。（※太字・下線は筆者による）

また、竜田徹*[2]は上記の橋本の言葉暢夫を次のように再定義している。

> 学習者が夢中になって学習に打ち込むことができ（学習者の必要感や学びの必然性）、巧拙や出来不出来が意識の中心から外れ（優劣のかなたへ）、言葉の力を自ら伸ばし続けることのできる（自分で学ぶ力）、学習の場

「実の場」とは、戦後間もない頃の国語教育の考え方だが、これは現行の学習指導要領で求められる「主体的（・対話的）で深い学び」と共通する部分がある。この「実の場」が実現できた時に初めて生きた国語力やつけたい力が生徒に身につくと考え、研究主題に「実の場」という言葉を用いた。

3　目指す生徒像および主題設定の理由

（1） 社会の現状から

現代社会は、人工知能（AI）、ビッグデータ、IoT などを中心とした急速な技術の発展によって「Society5.0」と呼ばれる時代に足を踏み入れている。これまでも社会は常に変化を遂げてきたが、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大や世界各地でおこる戦争や紛争などに伴ってその変化は加速度を増しており、複雑で多様な課題が生じるとともに未来を予測することが非常に困難な時代になっている。目の前にいる生徒たちは、そうした困難な時代を今後長期間にわたって生きることになるため、予測不可能な社会を生き抜くための「国語力」を身につけさせる授業が求められる。

（２） 中央教育審議会答申、学習指導要領から

令和３年に中央教育審議会より出された答申*[3]には、（１）のような時代を生きていく生徒に求められる資質・能力について「文章の意味を正確に理解する読解力，教科等固有の見方・考え方を働かせて自分の頭で考えて表現する力，対話や協働を通じて知識やアイディアを共有し新しい解や納得解を生み出す力」が求められると記されている。更に、同答申には「新型コロナウイルス感染症により一層先行き不透明となる中，私たち一人一人，そして社会全体が，答えのない問いにどう立ち向かうのかが問われている。」とある。つまり「答えのない問い」に対して、自身の「国語力」を用いて思考したり他者と対話したり協働したりすることで、答えや新たな価値を生み出す力を身につけることが必要不可欠であると言える。

また、『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編』*[4]には「豊かな人生の実現や災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を、教科等横断的な視点で育成していくことができるよう」とあることから、教科等横断的な視点が必要であることがわかる。そして『中学校学習指導要領（平成 29 年告示)』*[5]における「第４ 児童（生徒）の発達の支援」の中には「児童生徒が，基礎的・基本的な知識及び技能の習得も含め，学習内容を確実に身に付けることができるよう，児童生徒や学校の実態に応じ，個別学習やグループ別学習，繰り返し学習，学習内容の習熟の程度に応じた学習，児童生徒の興味・関心等に応じた課題学習，補充的な学習や発展的な学習などの学習活動を取り入れる」とある。「個別最適な学び」という言葉を見聞きする機会が増えたが、教師が黒板の前に立ち、答えのある問いを生徒に投げかけ、考えさせていく従来のような授業では前述してきたような力は育成できない。答えのない問いに対して、自分自身の考えや能力、興味関心に応じて学びを調整する力も合わせて育成していきたい。

（３） 国語科としての観点や本校生徒の実態から

２０１５年前後から、大学入試における小論文問題では「答えのない問い」に対して答えを創り出すようなお題が散見されるようになった。この出題の意図を想像すると、様々な情報をもとに自身の想像力を働かせ、課題を解決したり新たな価値を創造したりする力が求められていると考えられる。自身の感じたことや考えたことを言語化することは一朝一夕に出来るものではなく、またそれを「書く」ことで表現するとなると、苦手意識をもつ生徒も非常に多い。だからこそ、生徒の未来につながる「書くこと」の活動を、意図的に単元の中に組み込む必要があると考えた。

また、本校では通常級での授業に参加する特別支援学級在籍生徒の支援のために、他教科の授業を参観する機会が多くある。その際、生徒たちの国語力が各教科の学習に影響を与えている姿を多く目にする。例えば理科の授業において考察をまとめようとした時、実験の結果や過程はわかっているがそれを上手く言葉としてまとめられない姿。音楽科や美術科での鑑賞の際、心に響いているものはあってもそれを言語化できない姿。こうした生徒の姿から、国語科で身につけた力を他教科や他の場面に繋げる生徒の力を育成することが喫緊の課題だと考えた。国語科は、生徒たちにとって他教科での学びや日常生活、社会生活など全ての「基盤」となる教科であると考えるため、これまでの自身の授業を猛省した上で、国語科での学びを他の場面に繋げる単元をつくる必要がある。

4　研究の全体構想

本校の教育目標

「自立貢献」

1　よく考え、正しく判断して行動する生徒
2　思いやりの心で友と接することのできる生徒
3　主体的に学習する生徒
4　健康と安全に心がけ進んで体力を高める生徒

本校の研究主題

基礎的・基本的な知識・技能とICT機器を活用して自ら課題を解決しようとする力を育てる学習指導のあり方

①「深い学び」につなげていけるように各教科・領域で指導方法や授業の展開方法、学習形態等を工夫する。
②GIGAスクール構想に伴い、ICT機器を積極的に利用した授業を展開する。
③授業を行う環境・生徒が授業に臨む姿勢づくりを心がける。
④生徒が家庭学習を習慣化できるように努める。

本校国語科の研究主題

基礎的・基本的な知識・技能の定着とＩＣＴ機器を活用した思考力・判断力・表現力の育成

目指す生徒像

予測不可能なこれからの社会を生き抜くために、答えのない問いに粘り強く向き合い、様々な情報を得たり整理したりしながら想像力を働かせ、「書くこと」を通じて課題を解決したり価値を創造したりできる生徒。また、国語科で学習した内容を、他教科での学びや日常生活、社会生活に生かそうとする生徒。

研究主題

「実の場」を意識した「書くこと」の授業実践
～教科等横断的な学習、外部機関との連携を通して～

研究仮説

導入の工夫、教科等横断的な学習や外部機関との連携によって生徒の興味関心を引き出せば教室内は「実の場」となり、様々な資料と学習方法を用意すれば、生徒は自らの学びを調整しつつ、これからの時代を生き抜くための国語力や他教科や日常生活・社会生活にも生かせる国語力を身につけることができるだろう。

研究内容

（1）その学習をする必然性を担保する	（2）教科等横断的な学習や外部機関との連携を図る	（3）ワークシートや学習方法を工夫する
・社会の現状を説く ・大学の小論文入試に挑戦する ・生徒の興味関心をかき立てる導入を行う ・学んだことを別の場面に生かす	・千葉県立美術館より「複製画」を借用し、それをもとに鑑賞と発表を行う ・「複製画」もしくは「オンライン美術館」より絵画を選択し、物語づくりを行う ・制作した本のPOPを印西市立大森図書館に掲示してもらう	・語彙力に課題をもつ生徒を支援するための語彙リストを用意する ・学習の流れがわかるワークシートをつくる ・ICTを活用した資料作成、資料の共有をする ・学習の複線化をする

授業実践、実践を終えた後の生徒へのアンケート調査で検証

５　授業実践による検証

４の全体構想をもとに、２つの実践を行った。１つは、中学２年生を対象にした「絵画をもとにショートショート作品を創作する」単元。もう１つは、中学１年生を対象にした「オススメの本をもとにＰＯＰを制作する」単元である。

【単元１】

①　単元名：

絵画をもとにショートショート作品を創作しよう　～美術科との教科横断的学習を通して～

②　目標：

・抽象的な概念を表す語句の量を増やすとともに、類義語と対義語、同音異義語や多義的な意味を表す語句などについて理解し、話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き、語彙を豊かにすることができる。〔知識及び技能〕（１）エ

・伝えたいことが分かりやすく伝わるように、段落相互の関係などを明確にし、文章の構成や展開を工夫することができる。〔思考力、判断力、表現力等〕Ｂ（１）イ

・読み手の立場に立って、表現の効果などを確かめて、文章を整えることができる。〔思考力、判断力、表現力等〕Ｂ（１）エ

・言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。〔学びに向かう力、人間性等〕

③　指導と評価の計画（全１１時間）：

<table>
<tr><th>次</th><th>時</th><th>主な学習活動</th><th>評価規準・評価方法</th></tr>
<tr><td rowspan="4">第一次</td><td>1</td><td>・大学入試の小論文問題を解く
・入試問題から、求められる国語力について考える
・単元全体の見通しをもつ</td><td>［思考・判断・表現］小論文
・条件に従って、小論文の問いについて自身の意見を述べているかを確認する。</td></tr>
<tr><td>2</td><td rowspan="2">・小グループで絵の解釈について話し合う
・話し合った内容を「解説文」の形にまとめ直す</td><td rowspan="3">［知識・技能］［思考・判断・表現］解説文
・語彙リストを活用しながら自身の想像や考えを表現しているかを確認する。
・、聴く人に伝わりやすい「解説文」を作成しようとしているか確認する。</td></tr>
<tr><td>3</td></tr>
<tr><td>4</td><td>・作成した解説文を発表する</td></tr>
<tr><td rowspan="2">第二次</td><td>5</td><td>・絵画をもとにしたショートショート作品の例を読み、活動の見通しを持つ
・ショートショート作品を創るための絵画を選択する</td><td>［主体的に学習に取り組む態度］観察
・相手に伝わるように表現の方法や構成を考え見通しを持ってショートショート作品を創作しようとしているかを確認する。</td></tr>
<tr><td>6</td><td>・選択した絵画を各自で鑑賞し、情報をワークシートにまとめる
・鑑賞した内容に加え、絵画に切り取られた場面の前後を想像することでストーリーを考えていく</td><td>［知識・技能］［思考・判断・表現］
ショートショート作品
・語彙リストを活用しながら自身の想像や考えを表現しているかを確認する。</td></tr>
</table>

	7	・前時までの内容をふまえ、ショートショート作品を創作する	［知識・技能］［思考・判断・表現］ ショートショート作品 ・文章の構成や展開を工夫しているかを確認する。 ・読み手の立場に立って、表現の効果などを確かめて、文章を整えているかを確認する。
	8		
	9		
第三次	10	・完成した作品を互いに読み合い、感想を交流する	［主体的に学習に取り組む態度］観察 ・より多くの人の作品を読み、自分にはなかった鑑賞する視点や表現方法を学ぶようにする ・感想や思ったことを交流する中で、また新たな気づきや想像を広げられるようにする。
	11	・大学入試の小論文問題を解く ・単元を通じた振り返りを行う ・今回の単元でついた力を自覚する	［思考・判断・表現］小論文 ・最初と最後の小論文を比較して身についた力を確認する。

答えのない問いに向き合い答えを創り出す力をつけるために考案した単元である。本単元では、主に３つのブロックに分かれる。１つは、大学入試の小論文を説くことで学ぶ必然性を担保し、つけたい力を明確に示すブロック。２つめは、外部機関との連携や教科等横断的な学習を通じて生徒の学習意欲を高め、絵画の解説文をつくることで自身の想像力を広げたり感じたことを表現したりする力の向上を図るブロック。３つめは、それまでの学びを生かして絵画から物語をつくるブロックである。

④　授業の実際と研究内容との関連

★第一次（授業の導入）：大学の小論文問題を解く、求められる国語力について考える

関連する研究内容＝（１）その学習をする必然性を担保する

・社会の現状を説く　　・大学の小論文入試に挑戦する

・生徒の興味関心をかき立てる導入を行う

授業の導入として大学入試の小論文問題に取り組ませ、その上で出題の意図を考えさせた（**※生徒が取り組んだ大学入試の小論文問題は右記のＱＲコードを参照**）。

お題（１）や（２）は、恋人や宇宙人への手紙を書くという内容であったため生徒たちは遊び感覚で楽しみながら取り組んだ。一方のお題（３）や（４）は、写真を見て想像を広げ、想像したことを言語化しなければいけないため苦戦を強いられる生徒が多かった。活動後、これらの小論文の出題の意図を考えさせると「社会で必要な力だから」「将来、こういうことを表現できる力が求められているのだと思う」という考えが生徒から出された。ここで、予測不可能な時代を生き抜くためには答えのない問いに向き合い、自ら答えを創り出す力が必要不可欠であるということを説き、その力をつけるための単元を実施していくことを伝えた。社会で求められる力を理解し、その力を身に付けるために学習することは生徒にとって学ぶ必然性が担保されることになり、「実の場」としての学習がスタートするきっかけになったと言える。

★第一次：１枚の絵画を小グループで鑑賞し、解釈を話し合って解説文の形にまとめ直す

関連する研究内容＝（２）教科等横断的な学習や外部機関との連携を図る

・千葉県立美術館より「複製画」を借用し、それをもとに鑑賞と発表を行う。

・美術科担当より絵の鑑賞の仕方、鑑賞文の作り方を学ぶ

本単元は、絵画をもとにショートショート作品を創作することがメインの言語活動になるが、そもそも絵画を鑑賞できなかったり鑑賞したことを言語化できなかったりすれば意味がない。そこで、まずは絵画をグループで鑑賞し、解説文をつくって発表する活動を取り入れた。絵画の鑑賞を行うにあたり、今回は千葉県立美術館から複製画を借用した。オンライン上の絵画や印刷された絵画よりも、実物を目にする方が生徒たちの興味関心や学習効果を高めると考えたためだ。生徒たちは、実際に絵画を目にすると歓声をあげ、描かれているもの１つひとつ、絵の質感や色合いといったものまで注視する姿勢が見られた。話し合いの最中におもむろに立ち上がり、絵画に近寄る姿は、主体的に学ぼうとする姿であると感じた。この姿は、美術館から絵を借りたからこそのものだと考える。絵画の鑑賞の仕方、鑑賞文の作り方などについては美術科担当の協力を仰ぎ、国語の時間ではありながら右の写真のようには美術科担当に説明をしてもらう時間を設けた。

絵を借用した効果を確かめるためにアンケートを実施すると以下のような結果が得られた。その結果から、県立美術館との連携は生徒の学ぶ意欲を高め「実の場」をつくる要因の１つになったと考える。

〇今回は、本物ではないが複製画を借りてくることで実物を目の当たりにした鑑賞を行ったが、それについてどう思うか。⇒**「実物の方が良い」92.3%、「その他」7.7%**

（「実物の方が良い」と答えた生徒の理由）

・実物を見たほうが色の微妙な変化や表現技法などがわかりやすく実物のほうが、テンションが上がって美術館などにも興味が湧いてくるから。

・実物の方が、描いた人の「生」を感じることができると思ったから。

・プリントもいいけど、実物は筆の使い方や塗り方や絵の具の凹凸が鮮明に見えるから。あと作者の気持ちがブワッと心に来る。

・実物を目の当たりにすることで、筆使いやどのように配色したのかをじっくりと観察することができ、その絵画について色々と考えることができるから。

更に、「今回は絵画を扱った鑑賞に取り組んだが、それによって絵画に対する皆さんの興味関心に変化はあったか」という問いに関しては「86.5%」が「あった」と回答しており、絵画作品そのものに興味をもった生徒、絵画作品を鑑賞することを楽しむ生徒が増えたこともわかった。国語科としてつけたい力には直接つながらないが、教科横断的な学習を実施したことで「美術科」に対する興味・関心にも良い影響をもたらしたと言える。千葉県立美術館では絵の借用に加え、職員が学校に赴いてワークショップを行うプログラムなどもあるが、今現在利用する学校は減っているということだった。そのため、今回は絵を借用するに留まったが、それだけでも県立美術館の担当の方はありがたいと喜んでいた。

★第一次：１枚の絵画を小グループで鑑賞し、解釈を話し合って解説文の形にまとめ直す

関連する研究内容＝（３）ワークシートや学習方法を工夫する

・語彙力に課題をもつ生徒を支援するための語彙リストを用意する

・学習の流れがわかるワークシートをつくる

・ICT を活用した資料作成、資料の共有をする

「実の場」としての学習がスタートしても、国語科を苦手とする生徒を中心に、躓いた生徒の支援をきちんとしなければ、つけたい力には迫れない。そこで、生徒の学習をより効果的なものにするために配付する資料にも工夫をした（**※配付資料は、右記のＱＲコードを参照**）。「語彙リスト」は、音楽や美術の鑑賞を行うにあたって使用できる語彙を、複数の論文から筆者がまとめた*[7]。この語彙リストは必ず使わなければいけないものではなく、言語化を苦手とする生徒を支援するためのものである。使用する場合は、語彙リストの中から自分の感じたことにマッチする語彙を選び、感じとった「雰囲気」を表現させた。その上で、何故そう感じたのか、より具体的な言葉で表現するとどうなるかと「抽象⇒具体」を意識して鑑賞した内容を言語化していった。ワークシートや語彙リストの工夫の効果について、アンケートを実施すると、以下のような結果が得られたため、生徒の学習を支援する高い効果があったと言えるだろう。

〇今回の授業のワークシートやプリントは役立ったか。⇒**「肯定的回答」100%**。

（「役立った」「使いやすかった」と答えた生徒の理由）

・（絵画の）どこを見たらいいかのポイントがあったから。ワークシートの順番で書いていけば文が完成するようになっていたから。

・まとめることがいちばん苦手なので選択肢をもらえるだけでだいぶ楽にできました。

・語彙リストがあると自分が思っているものは「これだ！」って思うものや、近い表現があることで言葉が思いついたりしたし、例があることで想像しやすかったです。

・やる手順がわかったことで司会も話し合いもスラスラ進んだからです。

解説文は、ロイロノートを活用して発表資料を作成。複製画とともに発表資料を並べて、鑑賞内容をお互いに共有し合った。作成した資料はデータとして全員に共有もしているため、後でもう一度絵画を見て考え直したり、これらの絵を使用して物語をつくろうと考える生徒はその資料が参考にしたりできるようになっている。

（**※生徒が作成した絵の解説文は右記のＱＲコードを参照**）

★第二次： 個人で絵画を選択し、鑑賞した内容からショートショート作品を創作する

関連する研究内容＝（２）教科等横断的な学習や外部機関との連携を図る

・「複製画」もしくは「オンライン美術館」より絵画を選択し、物語づくりを行う

（３）ワークシートや学習方法を工夫する

・ICT を活用した資料作成、資料の共有　・学習の複線化　・語彙リストの配付

ショートショート作品を創作するにあたっては、ロイロノートで資料を配付して物語の構想を練り、作品は google ドキュメントによって創作した。（**※生徒に配付した資料は、右記のＱＲコードを参照**）

更に、第二次の学習では各自の興味関心や能力、得意・不得意などに応じて、学習方法の選択をできるようにしている。２で示した通り「実の場」は生徒にとって「主体的な学習の場」になっていることが条件になるが、高橋純*[8]は「子供ごとに、学習ペースなどの特性が異なることを前提にすれば、各自で学習目標を持ち、子供１人１人のペースで学習していくこととなる。つまり「複線型」の授業を指向することになる。」とした上で、「学校を卒業した後も生きて働く資質・能力の育成」を実現するためには「子供自身による、複数の学習活動の系列である「学習過程」の理解とその自己決定が重要となる」と述べており、「実の場」での学び、そしてつけたい力の育成を実現させるためには「複線型の授業」が必要であると考え取り入れた。具体的には「絵画の選択」「学習形態」それぞれで複数の選択肢を設け、合計「１４」の学習パターンから、自身の興味関心や能力に応じて学習の仕方を自己決定させた。

今回の単元では、グループ学習を選んだ生徒の中にも、同じ絵画・同じ設定とストーリーでそれぞれが物語を創るグループもあれば、同じ絵画を選んではいるが設定はそれぞれの鑑賞を元にしているグループ、同じ作者を選択しているが異なる絵画を選択して物語を創るグループなど、多岐にわたった。また、自身の進み具合やその日の気もちによって個別学習やグループ学習などを代える生徒もおり、自らの学習を調整する姿が多く見られた。

この学習方法の選択については、アンケートで以下のような結果が得られた。

〇今回は、学習パターンを各自で選択できるようにしましたが、それについてどう思う（やりやすかった）か⇒**「肯定的回答」100%**。

（生徒の回答）

・１人でやりたいってい子もいるだろうし、友達と協力したいなって子もいるだろうから自分で選べるのはうれしい。

・他の人に合わせずに自分のペースで進めることができた。

・自分は他人とやるときに、意見を合わせて流されてしまう時があるので、今回一人でやることで、自分の考えを思ったとおりに表現することができた。しかし、グループでやっていた人も、お互いの意見を交換し合いながら考えを深めることができていたと思うから。

・友達と意見を交換したり自分一人で集中して作業したりその都度やり方を変えられて、効率的に作業できたからです。

ちなみに、創作した物語を評価することは難しいため、事前にルーブリックを作成し、生徒に配付している。このルーブリックの資料は、学習指導要領における中２の目標、「書くこと」の段階に照らし合わせて作成をしている。生徒はこのルーブリックを見ながらより良い評価になるよう、見直しや推敲を繰り返している。一度ではなく、複数回このルーブリックと照らし合わせていくことで、生徒の創る

物語も少しずつ質が高まっていったと感じている。

書き終えた作品については、PDF にして保存し、ロイロノート上で共有した。互いに読んだ上で良かったところはコメントを残し合った。また、誰の作品を面白いと思ったか、印象に残ったか等も投票を行った（**※実際に生徒が作成した作品の一部は、右記ＱＲコードを参照**）。

この単元の最後の１時間では、最初にやった大学入試の小論文問題を改めて解き直した。この単元を通じて、答えのない問いに向き合って答えを創り出す力、鑑賞や想像によって自身が考えたことを表現する力がついているか試すことが狙いだ（**※生徒の作成した小論文の比較は、右記ＱＲコードを参照**）。これはほんの一例に過ぎないが、単元のはじめの頃よりも写真を捉える視点が細分化され、またそこから想像を広げて言語化しようとしていることがわかる。この写真からはそこまで読み取れないといった飛躍している回答も見られるが、それはそれで生徒の想像力、想像したことを言語化する力がついている証拠で、むしろ想像したことを書きたくなってしまっている状態にまで達したように感じた。

最後に、生徒に実施したアンケート調査よりいくつかの結果をまとめる。

○芸術作品を見ることは好きか。⇒**授業前：肯定的回答 57.7%➔授業後：75%**

○鑑賞の活動が好きか。⇒**授業前：肯定的回答 63.1%➔授業後 84.4%**

○鑑賞の活動は得意か。⇒**授業前：肯定的回答 42.3%➔授業後 53.3%**

○物語を創作することは得意か。⇒**授業前：肯定的回答 42.2%➔授業後 57.8%**

○自身の想像や考えを言語化することは好きか。⇒**授業前：肯定的回答 55.6%➔授業後 65.4%**

○今後、美術科や音楽科の授業でも再び「鑑賞」を行うことがあると思うが、それに向けて今回の授業は役立ったか。⇒**肯定的回答 94.4%**

・自分が感じた印象を擬態語や心情語を用いて言語化するという能力が高まったから

・美術や音楽の鑑賞の授業は一人でやるけど、今回はグループでやったから、他の人の意見もきけたのでそれを参考にして美術や音楽の鑑賞の授業ができると思ったから

・細かいところまで注目して想像するのは、鑑賞の授業はもちろん将来的にもすごく役に立つと思いました！

○単元全体の感想

・今までやったことがないような新しい感じで学習が進められていって面白かった。難しい単元だったけどはじめよりは想像を広げる力がついたと思う。

・絵の鑑賞を通して、絵の面白さがわかったし自分で物語を考えることでどの作品を見るだけよりももっと楽しむことができていい経験になりました。自分は中々美術館に行く機会はないから他の教科での鑑賞の授業に今回の授業でやった考え方や見方を活かしていきたいです。グループで学習したり個人で活動したり選べるのがすごく良かったです！！！

・はじめは、物語を考えたりするのは苦手だからやりたくないと思ったけれど、他の人の意見を聞いて、聞いたことを少し絡めて物語を考えたら、書きやすくなって、最後は、前よりは少し得意になったかなと感じた。

・もともと自分で感じたことを言葉にするのは得意な方ではなかったけど、今回の単元を通して、どんな風に書けばよいのか友達と話し合ったり、物語や文章をつくるのが上手な人のものを読んだことで言葉にするのが前よりは得意になりました。

・はじめは、絵から物語や説明文を創るなんて自分にはできないだろうなと思って少し気が乗らなかったけど、四人班で協力しながら絵画を分析していくうちに楽しくなっていったし、説明文が完成したときも達成感があって嬉しかった。物語を創るときも班で説明文を書いたときみたいに、今までとは違った目線や細かいところまで見て想像を広げられて、この授業を受けていなかったら、ここまで想像から物語を作り上げられなかったなぁと自分の成長を感じられて嬉しかった。

・最初は、自分が言語化することが苦手だったこともあり、今回の単元は、苦手だと思っていた。しかし、授業を進めて行くに連れて、苦手だった部分の改善方法や、絵画の鑑賞が楽しく、苦手という意識はなくなった。他の人の作品の鑑賞することができて、楽しかった。

・今までやったことない内容でしたが、先生のサポートがわかりやすくてほんとにやりやすかったです！ 絵画を見たり、自分で１から物語を創ったりするのがワクワクしてほんとに楽しかったです。グループで鑑賞したり、ペアで鑑賞したり、いろんな意見を聞きながら作品について考えられてよかったです！ オンライン美術館のことも知れて、これからもっと美術作品に注目していきたいです！！

上記の生徒の感想を見ると、自身の想いや考えを表現すること、物語を書くことなどに苦手意識を持つ生徒でも、夢中になって学習に向かっていたことがわかる。これは２で記した竜田徹の述べる「実の場」の定義「学習者が夢中になって学習に打ち込むことができ（学習者の必要感や学びの必然性)、巧拙や出来不出来が意識の中心から外れ（優劣のかなたへ)、言葉の力を自ら伸ばし続けることのできる（自分で学ぶ力)、学習の場」という条件を満たしていたからこそ、得られた生徒の感想ではないかと考えている。

【単元２】

① 単元名：本の魅力が伝わるＰＯＰをつくろう　～第２回　印西中学校ＰＯＰ―１グランプリ～

② 目標：

・比較や分類、関係付けなどの情報の整理の仕方、引用の仕方や出典の示し方について理解を深め、それらを使うことができる〔知識及び技能〕（２）イ

・目的や意図に応じて、日常生活の中から題材を決め、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすることができる。〔思考力、判断力、表現力等〕Ｂ（１）ア

・読み手の立場に立って、表記や語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、文章を整えること。〔思考力、判断力、表現力等〕Ｂ（１）エ

・言葉がもつ価値に気付くとともに、進んで読書をし、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。〔学びに向かう力、人間性等〕

③ 指導と評価の計画（全７時間）

<table>
<tr><th>次</th><th>時</th><th>主な学習活動</th><th>評価規準・評価方法</th></tr>
<tr><td>第一次</td><td>1</td><td>・ＰＯＰの特徴や効果を知る
・良いＰＯＰについて考える</td><td>［知識・技能］観察
・POP の特徴や効果を理解しているかを確認する。</td></tr>
<tr><td rowspan="4">第二次</td><td>2</td><td>・自身がオススメしたい本の基本的な情報をロイロノートにまとめる
・キャッチフレーズ等を考える</td><td rowspan="2">［知識・技能］［思考・判断・表現］
ロイロノート資料、観察
・本の情報や魅力が簡潔にまとめられているかを確認する。
・人を惹きつけるデザインや内容になっているかを確認する。</td></tr>
<tr><td>3</td><td>・基本的なデザインやレイアウトを考える</td></tr>
<tr><td>4</td><td rowspan="3">・決定したデザインやレイアウトをもとに、本の情報や魅力が伝わるようにＰＯＰを制作する</td><td rowspan="3">［思考・判断・表現］［主体的に学習に取り組む態度］作品（ＰＯＰ）、観察
・本の情報や魅力が簡潔にまとめられているかを確認する。
・人を惹きつけるデザインや内容になっているかを確認する。
・相手に伝わるように表現の方法や構成を考え、見通しを持ってＰＯＰの制作をしようとしているかを確認する。</td></tr>
<tr><td>5</td></tr>
<tr><td>6</td></tr>
<tr><td>第三次</td><td>7</td><td>・完成したＰＯＰを見せ合い、感想を交流する</td><td>・より多くの人の作品を読み、自分にはなかった鑑賞する視点や表現方法を学ぶようにする
・読んで終わりではなく、感想や思ったことを交流する中で、また新たな気づきや想像を広げられるようにする。</td></tr>
</table>

本のＰＯＰをつくるという単元はよくある実践であるが、こちらも「実の場」としての学習になるよう【単元１】と同様に様々な工夫を施している。本単元には大きく４つの特徴がある。１つめは、１年生の段階で毎年実施する単元として年間指導計画に位置付けていること。２つめは、完成した作品でコンクールを実施していること。３つめは、完成したものは全校生徒で鑑賞や投票を行い、国語科での１つの伝統としていること。そして４つめに、公立図書館である「印西市立大森図書館」と連携をしていることである。

④授業の実際と研究内容との関連

★第一次（授業の導入）：ＰＯＰについて知る

関連する研究内容＝（１）その学習をする必然性を担保する

・生徒の興味関心をかき立てる導入を行う　　・学んだことを別の場面に生かす

本単元での学びを「実の場」とするためには、【単元１】と同様、導入の部分が非常に重要になる。導入の部分では、「ＰＯＰ―１グランプリ」というコンクールを実施すること、良い作品については印西市立大森図書館に展示されることをまず伝えている。「コンクール」形式というだけでも学習に対する意欲が高まる生徒もいるが、自分のつくった作品が学校を飛び出して実際に多くの利用者の目に触れるかもしれないという期待感がより一層生徒の学ぶ意欲を高めているように見える。また、大森図書館に展示されなかったとしても、校内の図書室では全員分が掲示されることや次年度の学年のお手本になること、先輩たちもやってきている伝統があるということなどを知ると、大半の生徒が取り組む意義を見出しているように思う。これについてアンケートを実施すると

○ＰＯＰをつくる意義を理解したり必要性を感じたりしているか⇒**「肯定的回答」１００％**。

（肯定的回答をした生徒の言葉の抜粋）

・コンクールなら上位に入りたいし、図書館にも飾られたい。

・ＰＯＰをつくるのは難しいし大変だけど、図書館に飾られるように頑張りたい。

・ＰＯＰは買い物に行った際などにも目にすることが多いので、つくってみるとその目的がよりわかると思うから。

・先輩たちが作った作品を鑑賞して投票するのが楽しかったから、今年は自分が良い作品を作りたい。

本単元では、学ぶ目的や作成した成果物の活用方法などが明確になっているため、これらの要素が「実の場」をつくりあげているということが生徒の言葉からわかる。

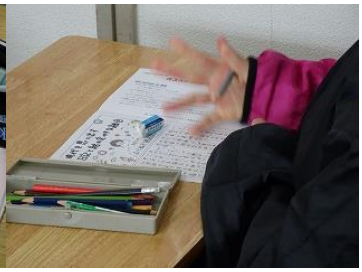
★第二次：デザイン検討、ＰＯＰの作成

関連する研究内容＝（３）ワークシートや学習方法を工夫する

・ICT を活用した資料作成、資料の共有をする　・学習の複線化をする

ＰＯＰを実際につくるまでに、ＰＯＰの役割や働きの説明、本の情報の抽出などの事前準備が必要になるため、資料やワークシートはロイロノート上で配付し、活動をさせた（**※配付資料は、右記ＱＲコードを参照**）。資料やワークシートもロイロノート上で配付することで、生徒は自分の好きなタイミングで資料を見返したり、手書きだと時間がかかる作業を短時間で効率よく進めたりすることができていた。

ＰＯＰを実際につくる際には全て手書きとしたが、この際には個人での制作、ペアやグループでの制作など自分で学習形態を選択できるようにした。しかし、一人ひとりが用いる本が全く違うため、アイディアをもらうために一時的にペアやグループになるところもあったが、基本的には１人で作業を進める生徒が多かったように思う。



★第三次：完成したＰＯＰを見せ合い、感想を交流する

関連する研究内容＝（２）外部機関との連携を図る

・制作した本の POP を印西市立大森図書館に掲示してもらう

完成した作品は掲示し、全校で鑑賞と投票を行っている。この投票によって選ばれたメンバーについては掲示物で知らせるとともに表彰を行っている。この投票で上位に入賞した作品、また上位には入らずとも授業担当者から見てよく出来ていると判断できた作品については、大森図書館に展示する準備を進めていった。展示の準備については、展示したい作品と大森図書館の蔵書状況を照らし合わせ、蔵書があったものについては生徒・保護者に展示の承諾をとった。昨年度実施した際は、たまたま大森図書館に蔵書されている本が少なくＰＯＰの掲示も少なくなってしまったが、それを受けて今年度は蔵書がなかった物も新しく購入してくださり、より多くのＰＯＰを掲示することができている。ＰＯＰづくりは３学期に実施しているため作品処理や準備の都合上、令和４年に作成したものは令和５年の夏休み期間に、令和５年に作成したものは今年度の夏休み期間に実際に掲示をしてもらっている。

（昨年度の展示）

（今年度の展示）

左の写真は、図書室の机上の様子である。大森図書館に展示されていない作品も、図書室の蔵書状況と合わせてスペースを設けて展示や配架を行っている。

大森図書館との連携について、図書館の方から以下のような言葉をいただいている。

・しばらく貸出の実績がなかった本が、生徒のＰＯＰが掲示されたことで貸出が行われた。
・（元々人気はあったが）ＰＯＰの掲載を受けて、３０件以上予約待ちになった本もあった。
・図書館の子ども離れが課題になっていたが、このＰＯＰの掲示期間は、子どもや子ども連れの家族などの来客が増えていたように思う。
・今年度は２年目だが、毎年行っていく定例行事にしたい。

展示された生徒はもちろん、その保護者から「数年ぶりに家族で図書館に行くきっかけになりました」といった喜びの声が聞こえた。自分たちの学びが、大森図書館の人や地域の方々の役に立っているという現状が、生徒の学びの達成感を生んだと言える。また、前述した通り、大森図書館への掲示はなかったとしても図書室において展示されていたり次年度の同単元の「お手本」になったりすることから「実の場」としての学習が成立していると言えると考える（**※図書館へ掲示されたＰＯＰや上位入賞したＰＯＰは、以下のＱＲコードを参照**）。

ＰＯＰを鑑賞した際の、生徒たちのコメントは以下の通りである。

・紙の形や字の形、レタリングも上手でした。興味がわくように、題材や色を選択していて、人目をひくように工夫しているのが伝わった。
・みんなとてもデザインが上手いが、見た目だけではなく内容もしっかりと書かれていて、わかりやすいと思いました。
・どれも上手かったですが、ストーリーや本の内容をよく理解しているからこそ作れている作品だなと思いました。
・本の世界観が、紙の形や色合い、デザインによく表されていると思った。その本をよく理解していて、好きだからこそ作れるんだろうなと思った。
・色々な人のＰＯＰを見たことで本への興味が出てきて、色々な本に向かい合おうと思いました。
・みんな完成度が高くて順位付けするのに困ってしまった。第四位までに入らなかった人も、デザインもよく目をひかれるものばかりでしたが、中でも私が選んだ四人の人は、デザインもよく、目にとまり、キャッチコピーがわかりやすくて読んでみたくなりました。
・ポップで読み手の心をつかめるのはすごいなと思った。
・ストーリーの内容もそうだけどやっぱりＰＯＰのデザインに一番目を惹かれました。みんな本にあったオリジナルのデザインでＰＯＰを作れていて本当にすごいと思ったし、本当にお店にありそうなぐらいうまかったです。色遣いや文字の使い方なども工夫されていたし、続きが気になるように書かれているＰＯＰがたくさんあって自分も読んでみたいと思う本をたくさん見つけることができました。

上記の生徒の感想には、今後の「読書生活」に結びつくような言葉がある。学習指導要領の国語の各学年の目標*[9]には「進んで読書をし（第１学年）」「読書を生活に役立て（第２学年）」「読書を通して自己を向上させ（第３学年）」と読書をすることが掲げられており、若者の読書離れが問題になる昨今、「実の場」として進んだ本単元は大きな学習効果をもたらしていると言えるのではないかと考える。

５　本研究の成果と課題

（１）成果

・【単元１】【単元２】のどちらでも、教科等横断的な学習や外部機関との連携を図ることで生徒の「実の場」での学びに良い効果をもたらすことが証明された。

・【単元１】では、大学入試の問題を解いたことで今後求められる力を知り、それが生徒の学習「必然性」を担保し、「実の場」としての生徒の主体的な学びにつながった。

・【単元１】では、千葉県立美術館から複製画を借用したことで、生徒の学習意欲が高まり、より質の高い学習に繋がった。また国語科としての枠を超え、「絵画」や「美術科」に対するイメージにも良い影響をもたらした。

・【単元１】では、教科書教材から離れたオリジナル単元ではあるが、社会や生徒の現状に鑑み、つけたい力に迫ることのできる単元になった。

・【単元１】では、使用できる語彙が少ない生徒に対して「語彙リスト」を配付したり、学習の見通しがたちやすい「ワークシート」を作成したりしたことで、生徒の学習の道筋が明確となり、生徒の学習を支援する要因となった。特に学力的に鑑賞文や物語をつくることが厳しい生徒も、最後まで取り組み、作品を完成させることができた。

・学習の複線化を図ったことで、それぞれの興味・関心や得意・不得意、学習の進み具合など実態に応じて学習を進めることができ、現行の学習指導要領で求められている「主体的な学び」や「自己調整学習」に繋がる学びができた。

・【単元２】では、ＰＯＰを制作した上でコンクールを行ったり印西市立大森図書館に展示したり、図書室や次年度の学習に活用したりなど学習する目的が明確であったため、【実の場】としての学習ができた。

・【単元２】では、印西市立大森図書館と連携を図ったことで公共図書館の利用者や貸し出し状況に微々たるものだが変化をもたらし、地域に貢献することができた。

（２）課題

・【単元１】は、教科書にないオリジナル単元であるため、教科書教材と並行して進める上で、授業時間を確保することが難しかった。

・【単元１】では絵画の鑑賞の仕方や解説文の作り方、【単元２】ではＰＯＰのデザインなど美術科との連携が必要不可欠であったが、そのどれもが「国語科」の授業時数で行われたものであるため、「美術科」の授業のコマを使って進められる部分があると良かった。

・【単元１】では、千葉県立美術館との連携が「複製画を借用する」という点のみになってしまったため、作成した解説文やショートショート作品を展示してもらう、評価してもらう等、より密な連携ができたら良かった。

・ショートショート作品、ＰＯＰ等、創作作品は評価が難しい。今回は学習指導要領の「書くこと」の段階に応じてルーブリックを作成したが、細分化されすぎて中学生にとっては難しかったようにも思う。評価規準のつくり方、示し方等も検討していきたい。

・「語彙リスト」や「ワークシート」は、生徒から肯定的な評価が得られたが、その資料の内容の質や量についてはそれが適切なものだったのか、検討する余地はある。

引用文献

*[1]橋本暢夫（2001）「実の場」日本国語教育学会『国語教育辞典』朝倉書店

*[2]竜田徹（2010）「大村はま国語教室における「実の場」の検討」中国四国教育学会『教育学研究紀要』

*[3]中央教育審議会答申（令和３年）「令和の日本型学校教育」の構築を目指して　～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～」

*[4]『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編』（文部科学省，2018：53）

*[5]『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）』

*[6]『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 国語編』（文部科学省，2018：22）

*[7]萱のり子（2015）「鑑賞活動における言語とイメージの共有に関する一考察」、関口洋美（2014）「オノマトペを活用した芸術鑑賞における感性評価」、太田公子・井佐原均（2001）「聴取した音楽演奏の印象を表す形容詞の選択過程」、若井義弘（2008）「鑑賞の観点を自己内で意識化させるための小学校音楽家の実践」、佐賀県教育センター（2017）「聴き取ったことを表す言葉の例」、黒澤馨（2010）「図画工作科における言語活動を重視した鑑賞授業」より抽出

*[8]高橋純（2022）「１人１台端末を活用した高次な資質・能力の育成のための授業に関する検討」

*[9]『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 国語編』（文部科学省，2018：15）

参考文献

・令和３年版科学技術・イノベーション白書

・下田実（2009）「大村はま国語教室の『実の場』における関係の構築　―『単元　知ろう世界の子どもたちを』のグループ編成をてがかりにして―」

・秦美穂（2018）「国語教育における『実の場』の追求―『実の場』の要素に着目して―」

・三藤恭弘（2022）「『物語の創作』学習がもつ意味」

・山本茂喜、川田英之、大西小百合（2012）「中学校における物語創作の方法と意義（１）―ライティング・ワークショップを用いた授業の構想―」

・田中博之、蛯谷みさ（2017）「小学校国語科学習における物語創作の授業開発　～単元『とべないほたる第１３巻を創ろう！』の型を用いる指導技術の分析～」

・中山萌（2023）「試行実践を基にした全員達成を可能にする物語創作に関する研究」

・編：ローレンス・ブロック・訳：田口俊樹『短編画廊　絵から生まれた１７の物語』（2021）ハーパーコリンズ・ジャパン

・岡部昌幸『語れるようになる西洋絵画のみかた』（2019）成美堂出版

・末永幸歩『１３歳からのアート思考』（2020）ダイヤモンド社

・山内舞子『教養として知っておきたい名画 BEST100』（2021）永岡書店

・三藤恭弘『「物語の創作」学習指導の研究』（2021）渓水社

・新井一樹『シナリオ・センター式物語のつくり方』（2023）日本実業出版社

・森沢明夫『プロだけが知っている小説の書き方』（2022）飛鳥新社

・秀島迅『プロの小説家が教えるクリエイターのための語彙力図鑑』（2023）日本文芸社

・飯間浩明『気持ちを表すことばの辞典』（2021）ナツメ社